
麗しの朝

真雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麗しの朝

【コード】

N9704Y

【作者名】

真雪

【あらすじ】

電車の中のお話です。リクエストを頂いて書きました。

あと一駅。次の停車駅を告げるアナウンスを聞くと、鏡を取り出すのが日課になった。前髪を整えて、隅でリップをこすり塗り直して、スカートの皺を伸ばして、出入り口を見つめる。

朝の電車は様々な人々の香りで溢れ返っている。高級そうな衣服に身を包んだおばさまのちよつときつい化粧品、隣の学校の制服を着た男子の整髪料、お母さんに抱かれた子どもからふわりと香るミルクの匂い。それらが混ざり合った空気は、時に息苦しくて、時に心地良くて、朝がくるたびに形を変えて学校までの十五分を密かに彩る。

乗り物酔いが酷くて携帯をいじるのも難しい私は、何気なく車内を観察するのが好きだった。最初はイヤホンを入れていたけど、そこそと交わされる会話が耳に入るのが楽しくていつしか外してしまった。私が乗る車両は決まっていて、通学や通勤に勤しむ人々の顔ぶれはほぼ変わらない。いつもみんな眠たそうな顔をして、これから始まる日常にうんざりしている人も少なくない。その中で一人だけ、常に華やかな表情を見せる人がいた。

堅苦しいスーツと眼鏡がよく似合うその人は、私よりふたつ後の駅で乗り込んで、ひとつ前の駅で降りていく。たった二駅の間、よっぽど空いていない限り座ることはなかった。吊革を掴むとすぐに文庫本を開き、挟んでいた栞を落として読み始める。カバーのかがっていないそれは大昔のロマンス小説だったり、最近映画化した推理ものだったり、発売されたばかりのサスペンスだったりした。車内で本を読む人自体は少なくもないが、読み勧める展開にそってあからさまに表情を変えるのはその人だけだった。

名前も年齢も知らない、勤めている会社も分からない。指輪はつけていないけれど、それだけで彼女がいなかどうかなんて分からない。背は百五十の私が見上げるぐらい大きくて、黒いフレームの

ついた眼鏡は涼やかな目元によく似合っていた。

その人が乗り込んでも、私は自分の定位置からは移動しない。もしも彼が近くの吊革を選んだら、今日はいいい日。見えないぐらい遠くを選んでしまったら、ちょっとついていない。そんな恋に近くて恋じゃない何かは、誰にも教えたくないぐらい楽しかった。例えば彼と同年代の、制服の日々を懐かしむ人々から見れば恋愛ごっこだと笑われるようなものだとしても。

街路樹の葉が紅を深くし始めて、朝方や夜になると息が白くなる季節になっていた。

期末テストの時期はどここの学校も同じなのか、車内でも単語帳を開く学生が多く、それを見るたびに三半規管強くないかなあ、とどうしようもない願いを浮かべてはあの人の姿を見て気を取り直した。

どんな学生時代を送ったのか、その期間に学んだことは今の仕事に少しでも反映しているのか、目標を実現することはできたのか。想像するだけで楽しかった。聞く機会なんて与えられなくていい、こうしていつまでも夢を見ていたい。

そんなささやかな毎日に満足していたのに、学生の身は嫌でも異変を味わわなければならぬ。

「一度楽な方向に逃げると、戻ってくるのは難しいぞ。まだ若いんだから、そんなに投げやりになるな。」

失礼だとは思いつつも、担任が眉間の皺を濃くするたびに溜息が零れた。

人間を評価するのは偏差値じゃない、成績じゃない。そう声を揃えて大人は私たちの背中を押すふりをしておきながら、未来への進路を書類と数値で暗示する。学校に行きたくない、なんて子どもじみた願望をこの年になって口に出すわけにはいかなかった。放課後に進路相談を控えた今朝は、車内アナウンスもまともに頭に入らないぐらい憂鬱だった。

気づくと、あの人が降りる駅に停まっていた。咄嗟に姿を目で探したが見当たらない。もう降りちゃったかな、明日は祝日だから会えないのに、と俯きかけたとき、目の前に一冊の文庫本が差し出された。反射で顔を上げる。

「あげる。」

声を聞いたのは初めてだった。蕾が花びらをほくように、雲が月光を受け止めるように、想像していたよりも柔らかかなそれは呆然としたまま私に本を受け取らせた。

「良ければ、感想聞かせて。それじゃ、学校頑張つて。」

まるで長年の知り合いを相手にしたようにゆつたりと微笑むと、悪戯っぽく眼鏡をずらして降りていった。あまりに唐突な出来事にお礼すら言えないまま、電車は扉を閉ざして発車した。

安定したリズムを持って揺れる車内で、とんでもない高価なものに触れるようにそつと表紙を開いた。

出版社とタイトル、著者名が書いてあるページの下に、走り書きで『思いつめるな、受験生。』と書かれてあった。

ギリギリに留めてあった涙が一粒、頬を滑った。私の存在を認識されていた嬉しさと、みつともない表情を見られた恥ずかしさと、簡素な励ましの言葉を焦がれるほどに欲していた自分への驚きが、滑らかに溢れ出たのだ。

酔ってしまうといけないから、と自分を諫めるように軽くページを捲る。煙草と香水が混ざった男の人の匂いがして、またどきんと心臓が跳ねた。

抱きすくめられたような錯覚を覚えて、ひとり顔を赤くした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9704y/>

麗しの朝

2011年11月29日03時48分発行